

# 久富大門口遺跡

福岡県筑後市大字久富所在遺跡の調査  
筑後市文化財調査報告書 第18集

1998

筑後市教育委員会

ひさ どみ だい もん ぐち い せき  
久富大門口遺跡

分譲住宅の開発に伴う埋蔵文化財発掘調査

1998

筑後市教育委員会

## 序

本書は、宅地分譲の開発に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。発掘調査地点となりました久富地区には、古くから地元の方々に伝え守られてきました「鬼の修正会」や「五重塔」(ともに県指定文化財)のある熊野区熊野神社や熊野区坂東寺が所在します。

さて、今回の発掘調査では古代から中世の集落周辺部が確認され、当時の様相を垣間みることができましたが、具体的な内容につきましては、周辺部の調査に期待せざるを得ません。

今後の文化財愛護思想普及の一助として、また、学術研究の資料として広く活用していただければ幸いです。

この報告書の発行にあたり、御指導と御協力をいただきました関係者各位、また、調査に参加されました作業員の皆様に、厚くお礼申し上げる次第です。

平成10年3月20日

筑後市教育委員会  
教育長 森田基之

## 例　言

1. 本書は、分譲住宅の開発に伴い、コスモスタンダード株式会社の委託を受け、筑後市教育委員会が実施した久富大門口遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査地点は、福岡県筑後市大字久富1436外で開発面積は9,235m<sup>2</sup>、発掘調査面積は7,700m<sup>2</sup> 調査期間は平成9年4月30日から同年10月3日までの間実施した。
3. 発掘調査は、小林勇作、柴田剛が担当し、末吉隆弥の協力を得た。
4. 遺構の実測図作成及び写真撮影は、上記担当者の他に江崎貴浩、高野奈緒美、奥村太郎が行い、遺構の全体写真は（有）空中写真企画（代表　壇睦夫）に委託した。
5. 遺構実測の基準点は、国土調査法第Ⅱ座標系によっているため、本書に示す方位はすべて座標北（G.N.）である。
6. 遺物の実測図作成及び清書は平塚あけみ、江藤玲子、末吉が行い、遺物の写真撮影は小林、柴田が行った。なお本文中に記載した遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
7. 本書に使用した遺構の表示は、下記の略号による。

SD—溝 SK—土壤 ST—墓 SP—ピット SX—不明・その他の遺構

8. 本書の執筆は、2.位置と環境を柴田、3.（2）の出土遺物を平塚が担当し、その他の執筆・編集は小林が担当した。

## 目　次

1.はじめに	1
2.位置と環境	2
3.調査の概要	5
(1)検出遺構	5
(2)出土遺物	10
4.おわりに	13

## 1. はじめに

コスモスタンダード株式会社は、筑後市内に分譲住宅の開発を計画し、予定地内の埋蔵文化財の有無とその取り扱いについて、筑後市教育委員会に照会を行った。筑後市教育委員会ではこれを受け、現地の確認調査を実施することになった。

重機を使用した確認調査を実施した結果、開発予定地内のはば全面から溝や土壌などを確認したため、開発原因者と埋蔵文化財の取り扱いについての協議を重ね、開発面積9,235m<sup>2</sup>の内の7,700m<sup>2</sup>を発掘調査対象面積として実施することになった。調査は平成9年4月30日から10月3日まで、廃土置き場などの都合により、2回に分けて調査を実施し、6月14日と10月2日に遺構全体の空中写真撮影を行った。また、整理作業及び報告書作成は、筑後市教育委員会文化財整理室にて随時行った。

なお、発掘調査及び整理に伴う費用は、すべてコスモスタンダード株式会社が負担した。

発掘調査及び整理作業の関係者は次の通りである。

### 調査体制

#### 1) 調査主体

筑後市教育委員会

#### 2) 総括

教育長	森 田 基 之	
教育部長	津 留 忠 義	
社会教育課長	山 口 逸 郎	
社会教育係長	田 中 清 通	
社会教育係 (文化財担当)	水 見 秀 徳	小 林 勇 作 (調査担当)
	田 中 刚	上 村 英 士 (H9.6.1~)
(嘱託)	柴 田 刚 (調査担当)	立 石 真 二 (H9.8.1~)

#### 3) 発掘調査参加者

地元有志

#### 4) 整理作業参加者 (順不同、敬称略)

平塚 あけみ (整理補助員)	江藤 玲子	江崎 貴浩	奥村 太郎
末吉 隆弥	野間口靖子	馬場 敦子	湊 まど香

なお、発掘調査および整理にあたっては以下の方々にご教示、ご指導を頂き、調査を終えることができた。記して感謝の意を表す。

小田和利 (福岡県教育庁南筑後教育事務所)

狭川真一、山村信榮 (太宰府市教育委員会)

## 2. 位置と環境

久富大門口遺跡は、福岡県筑後市大字久富1436外に所在する。

筑後市は、福岡県の南西部、筑後平野のほぼ中央に位置し、市の北は久留米市、三瀬町、南は瀬高町、東は八女市、西は大木町に隣接している。JR鹿児島本線と国道209号が市の中央を南北に貫き、国道442号は東西に横断する。一級河川の矢部川や水田の灌漑用水として整備された人工河川の山ノ井川、花宗川が市内を西流する。

当遺跡が所在する久富地区は、多くの古墳が点在する八女丘陵から更に延びた南端部に立地し、寛延年間（1748～1751）に中島安平が堰や用水路を開削し、「四十八堀」と呼ばれたほど溜池の多い地区で、現在なお、「斗代溜池」「市ノ玉溜池」「八反堀」などが残る。また、当遺跡の周辺には県指定文化財が点在している地区でもある。毎年1月5日に行われる鬼の修正会・追儺祭や眼鏡橋（熊野区熊野神社）、毎年8月14日に行われる施餓鬼行事の久富盆網曳き（久富区熊野神社）、8世紀創建（社伝）の熊野区坂東寺境内には貞永元年（1232）に立造された石造五重塔がある。

次に市内の著名な遺跡について、時代ごとに概観する。市内から発見された旧石器は坂口遺跡から出土した角錐状石器のみである。縄文時代の遺跡は、早期の押型文土器を出土した裏山遺跡や落とし穴遺構を検出した藏数森ノ木遺跡、田佛遺跡、若菜森坊遺跡などがあげられる。弥生時代の遺跡では、多くの堅穴住居跡を検出した藏数森ノ木遺跡や甕棺を検出した藏数東野屋敷遺跡などの遺跡が、市内の全域に分布する。古墳時代になると八女丘陵一帯に古墳が点在し、広川町と筑後市にまたがる国指定文化財として有名な石入山古墳や八女市の岩戸山古墳があげられる。市内には市指定文化財である前方後円墳の欠塚古墳と珠文鏡が出土した円墳の瑞王寺古墳（消滅）が所在し、集落遺跡では堅穴住居を検出した田佛遺跡や久富鳥居遺跡などがある。奈良時代の集落遺跡は多数の堅穴住居を確認した若菜森坊遺跡や前津中の玉遺跡などがあり、平成9年度に実施した前津中の玉遺跡第2次調査では、更に集落が広がることが確認された。また、古代の官道である「西海道」跡とされる遺構を鶴田市ノ塚遺跡で確認し、西海道は市のはば中央を縱断することが推定される。中世では居館跡とされる長崎坊田遺跡、大字下北島に所在する櫻崎遺跡があり、近世遺跡は四ヶ所古四ヶ所遺跡が確認されている。

### （参考文献）

- 筑後市文化財報告書「龜山遺跡」 筑後市教育委員会 1966  
＊ 「瑞王寺古墳」 第3集 筑後市教育委員会 1984  
＊ 「前津中の玉遺跡」 第4集 筑後市教育委員会 1987  
＊ 「田佛遺跡」 第9集 筑後市教育委員会 1988  
＊ 「藏数遺跡群」 第6集 筑後市教育委員会 1990  
＊ 「高江遺跡」 第7集 筑後市教育委員会 1991  
＊ 「欠塚古墳」 第8集 筑後市教育委員会 1993  
＊ 「復崎遺跡」 第9集 筑後市教育委員会 1993  
＊ 「四ヶ所古四ヶ所遺跡」 第10集 筑後市教育委員会 1994  
＊ 「久富鳥居遺跡」 第13集 筑後市教育委員会 1994  
＊ 「羽犬塚射場／本遺跡」 第17集 筑後市教育委員会 1995
- 「筑後市神社仏閣」 筑後市教育委員会 筑後郷土史研究会 昭和43年

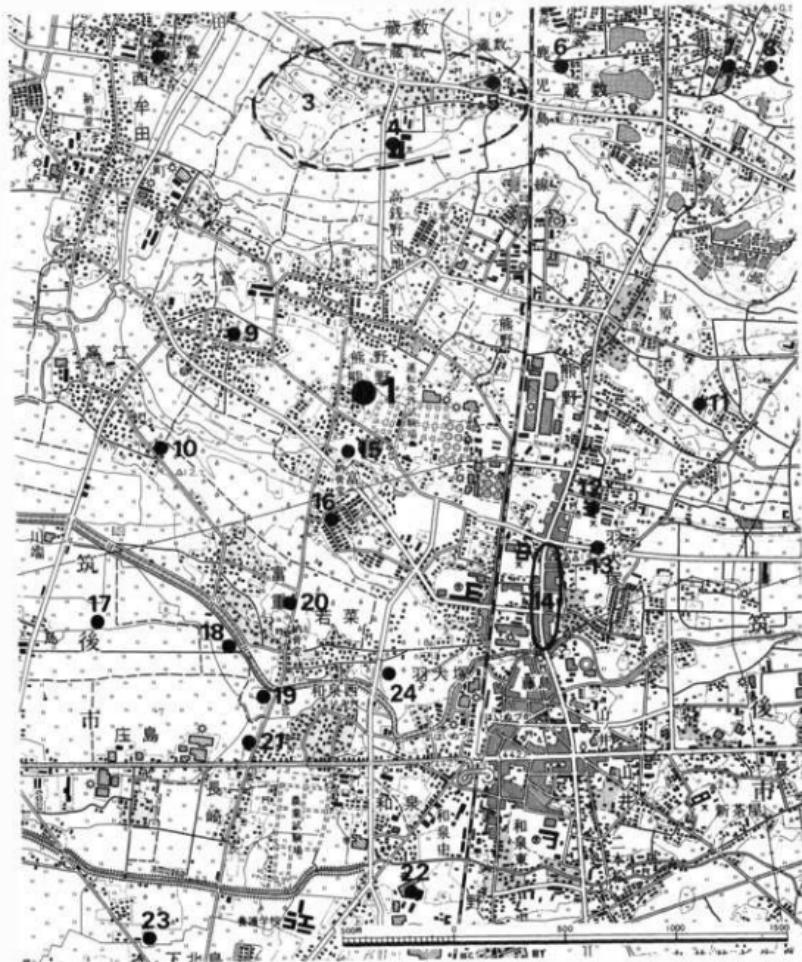


Fig.1 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

- |              |            |            |            |
|--------------|------------|------------|------------|
| 1.久富大門口遺跡    | 2.梵寺遺跡     | 3.藏敷遺跡群    | 4.藏敷森ノ木道路  |
| 5.藏敷東野屋敷遺跡   | 6.長原山遺跡    | 7.藏敷赤坂遺跡   | 8.鶴の谷道路    |
| 9.久富鳥居后遺跡    | 10.高江遺跡    | 11.前津中の玉道路 | 12.羽大塚中道道路 |
| 13.羽大塚射場ノ本遺跡 | 14.羽大塚町圓   | 15.久富斗代道路  | 16.久富市ノ玉道路 |
| 17.若葉立井遺跡    | 18.若葉田中前道路 | 19.若葉湖ノ江道路 | 20.让道路     |
| 21.坊田遺跡      | 22.井原口遺跡   | 23.久清道路    | 24.若葉森坊道路  |



Fig.2 調査地点位置図 (1/5,000)

### 3. 調査の概要

#### (1) 検出遺構

当遺跡は標高13.5m位の中段丘上に位置し、北部は緩やかに傾斜している。現況は葡萄などの畠で、調査区は開発によって掘削・削平の及ぶ7,700m<sup>2</sup>を調査対象とし、廃土置き場などの都合から調査は2回に分けて実施することにした。

調査の結果、畠の表土（表面から茶色土→黒色土→淡灰色土）を30~50cm程度除去すると遺構面である茶褐色粘質土や黄褐色粘土の地山が現れる。遺構面は近世から現代にかけての耕作などによって激しく擾乱されており、古代の土壤や中世の溝などがわずかに検出されたにすぎなかった。

#### I. 溝

##### SD01 (Fig.3)

調査区の北西部で検出した東西に延びる溝で、調査区の設定上、溝の南半分を検出したにすぎなかった。このため、溝の幅は不明であるが、溝の検出長は約55.00m、深さは約0.60mを測る。出土遺物は、須恵器（鉢）や土師器（皿：糸切り・土鍋・すり鉢）、磁器（青磁碗：龍泉・白磁片）、陶器（鉢・甕）などを各層位で散在的に出土しているが、埋土中からビニールを認めていたこともあり、溝の時期については特定できなかった。

##### SD02 (Fig.4)

調査区のはば中央部で検出した南北方向の溝で、検出長は約75.00m、幅0.90~1.50m、深さ0.16~0.30mを測る。溝の埋土は黒色土や褐灰色土が大半を占め、溜水などは確認できなかつた。出土遺物は、各層から散在的に須恵器（甕・鉢）、土師器（皿：糸切り）、磁器、陶器などを出土している。

##### SD03 (Fig.5)

調査区の南東部から検出した溝で、一部調査区にかかる。溝は東西方向に延び、西部は南北

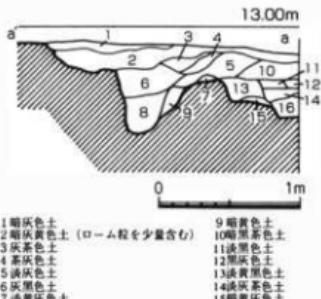


Fig.3 SD01土層断面実測図 (1/40)

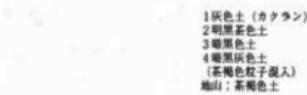
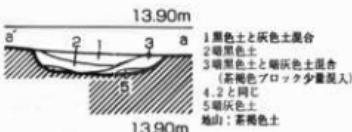


Fig.4 SD02土層断面実測図 (1/40)

方向に屈曲している。コーナー北の部分では溝とは明らかに異なる埋土を確認した。調査では堆積土が全体的に締まっている状況が確認でき、人為的に埋められたものと考えられる。このため、陸橋として扱ったが、溝との相互性はつかめず、疑問点を残すこととなった。溝からの出土遺物は各層から須恵器（鉢）や土師器（皿：糸切り）、すり石などを若干認めたにすぎず、13～14世紀を比定する。

## 2. 土壌

### SK13

隅丸長方形を呈する土壤で、SD03西北部に隣接する。長軸約1.23m、短軸0.75m、深さ0.16mを測り、堆積土は上層から黒色土（茶褐色土ブロックを含む）→

茶色土（黑色粒子を多く含む）であった。土壤の主軸はN-62°-Eで、出土遺物はなかった。

### SK14

調査区南西部から検出した梢円形の土壤で南側は調査区にかかる。土壤の幅は1.35m、深さは0.34mを測り、埋土は主に黒色土の单一土層であった。遺物は出土していない。

### SK15 (Fig.6)

調査区のほぼ中央で検出した隅丸長方形の土壤で、埋土は黒茶色土を主体としていた。土壤の西半分は擾乱されており、底面はほぼフラットである。長軸は2.00m、推定短軸0.60m、深さ0.29mを測り、主軸はN-32°-Eである。土壤墓としての可能性もあるが、ここでは断定できなかった。出土遺物は皆無であった。

### SK16 (Fig.6)

ST05の南に隣接する隅丸長方形の土壤で、埋土は暗黒色土を主体とし、葡萄の根による擾乱が著しく、土壤墓としての可能性も否定できない。規模は長軸2.65m、短軸0.60m、深さ0.32mを測り、底面の南部はやや段がついて下がる。主軸はN-20°-Wで出土遺物は皆無であった。

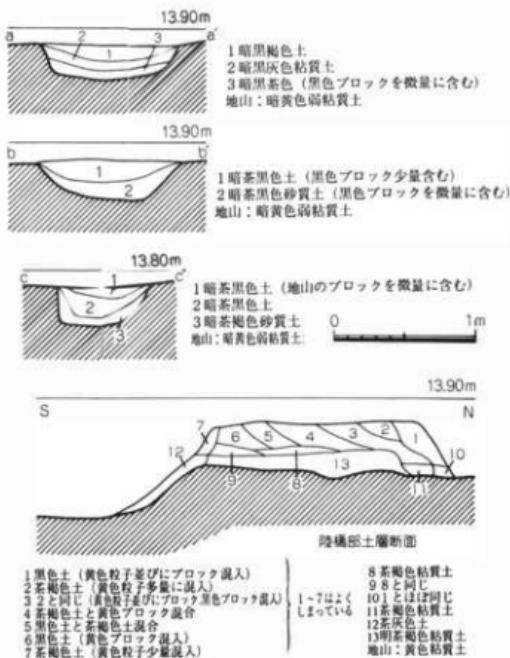


Fig.5 SD03土層断面実測図 (1/40)

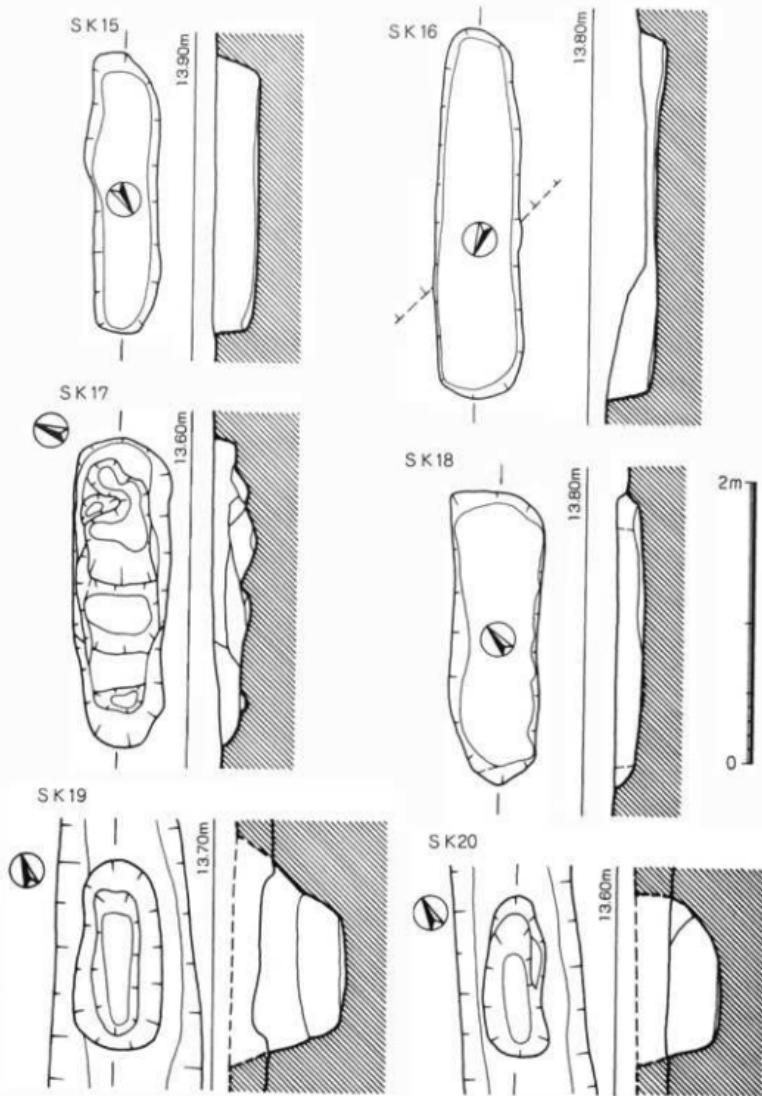


Fig.6 土壌実測図 (1/40)

#### SK17 (Fig.6)

調査区の南西部で検出した隅丸長方形を呈する土壙である。堆積土は上層が暗黒茶色土（茶褐色土粒子が多く含む）で、底面直上に薄く黄褐色土が堆積し、底面は凹凸が激しい。規模は長軸1.90m、短軸0.58m、深さ約0.20mを測り、出土遺物はなかった。主軸はN-70°-E。

#### SK18 (Fig.6)

ST10の東に隣接し、長軸2.10m、短軸0.62m、深さ約0.20mを測る。堆積土は暗黒色土からなり、底面直上に薄く黄褐色土が堆積する。耕作物によって激しく搅乱されていたため、底面は凹凸が激しい。出土遺物は皆無で、主軸はN-40°-E。

#### SK19 (Fig.6)

SD02の溝直下で検出した隅丸長方形の土壙である。主軸はN-20°-Eで、長軸1.35m、短軸0.63m、深さ約0.60mを測る。埋土は上層から暗黒褐色土→暗黒茶色土（黄褐色土ブロックを多く含む）→茶色土であった。遺物は暗黒褐色土中から土師器（土鍋）と各層から散在的に5~10cm大の河原石を数個認めた。

#### SK20 (Fig.6)

SK19と同じくSD02南部の溝直下から検出した隅丸長方形の土壙である。規模は長軸1.14m、短軸0.41m、深さ約0.40mを測り、主軸はN-30°-Eであった。出土遺物はなく、堆積土は上層から暗黒褐色土→暗黒茶色土（黄褐色土ブロックを多く含む）の2層に分別される。

### 3. 土壙墓

検出した土壙から副葬品と思われる遺物が出土したため、土壙墓とした。

#### ST05

調査区ほぼ中央の南部から検出し隅丸長方形を呈する。長軸1.68m、短軸0.47m、深さ0.15mを測り、主軸はN-20°-Wである。著しく葡萄の根による搅乱を受けており、埋土は主として暗黒色土であった。副葬品と思われる須恵器（坏）が土壙墓底面から逆さまになった状態で出土した。

#### ST10

調査区の西端部で検出した長軸1.96m、短軸0.75m、深さ0.40mを測る隅丸長方形の土壙墓で、主軸はN-60°-Wある。堆積土は上層が暗黒色土、下層が暗黒茶色粘質土で、暗黒色土中の検出面に近いレベルから須恵器（蓋）を出土した。このため、副葬品としての可能性は極めて低い資料である。

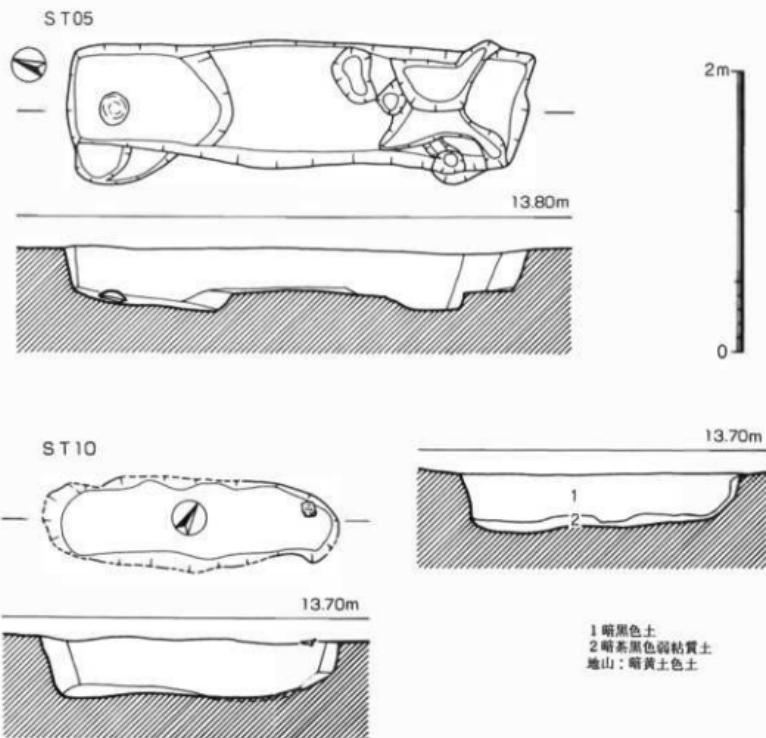


Fig.7 ST05・10実測図 (1/40)

#### 4. その他の遺構

##### SP04

調査区の西端部で検出した。埋土は暗黒色土を主体とし、遺物は土師器、黒曜石を出土した。

##### SP12

調査区の西端部で検出した梢円形のピットで、埋土は暗黒色土を主体とする。出土遺物は皆無であった。

##### SX21～23 (Fig.8)

調査区からは風割木痕とみられる遺構が10基以上確認された。これらのうち、断削って土層を確認した3基のみをFig.8に示した。

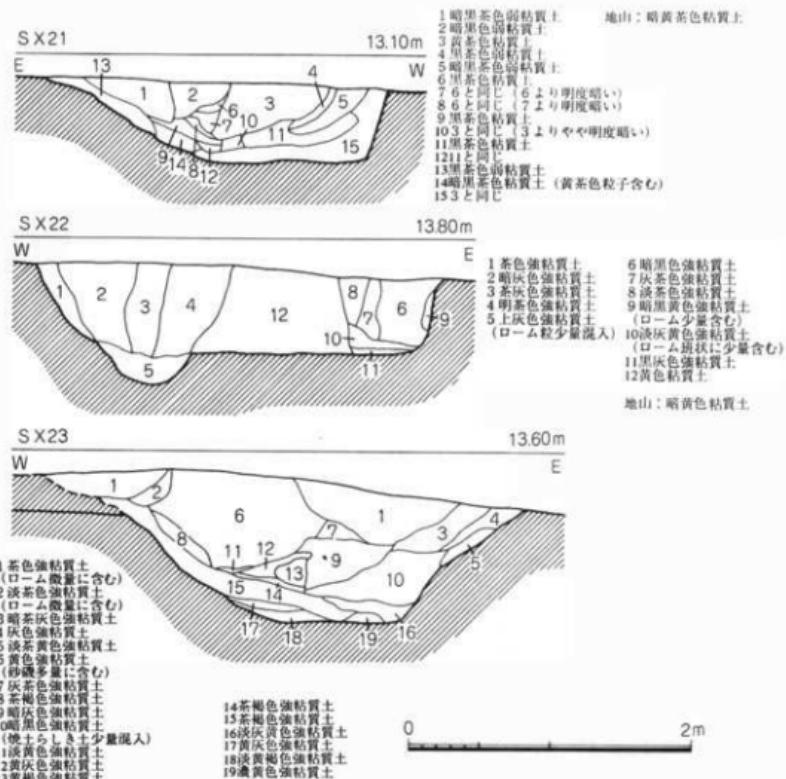


Fig.8 SX21~23土層断面実測図 (1/40)

(2) 出土遺物 (Fig.9)

#### SD02

##### 土器器

小皿 (1・2) いづれも底部は糸切りで、胎土・焼成とともに良好である。口径8.3~8.6cm、底径6.0cmを測る。

坏 (3) 底部の破片で、糸切りのち板目压痕がみられる。底径7.5cmである。

鉢 (4) 口縁部を肥厚させ、玉縁状につくる。淡赤褐色を呈し、口径21.8cmを測る。

#### SD03

##### 青磁

碗 (5) 龍泉窯系の鍋運弁である。運弁はやや不鮮明で、黄褐色の透明釉をかける。口径は16.6cmである。

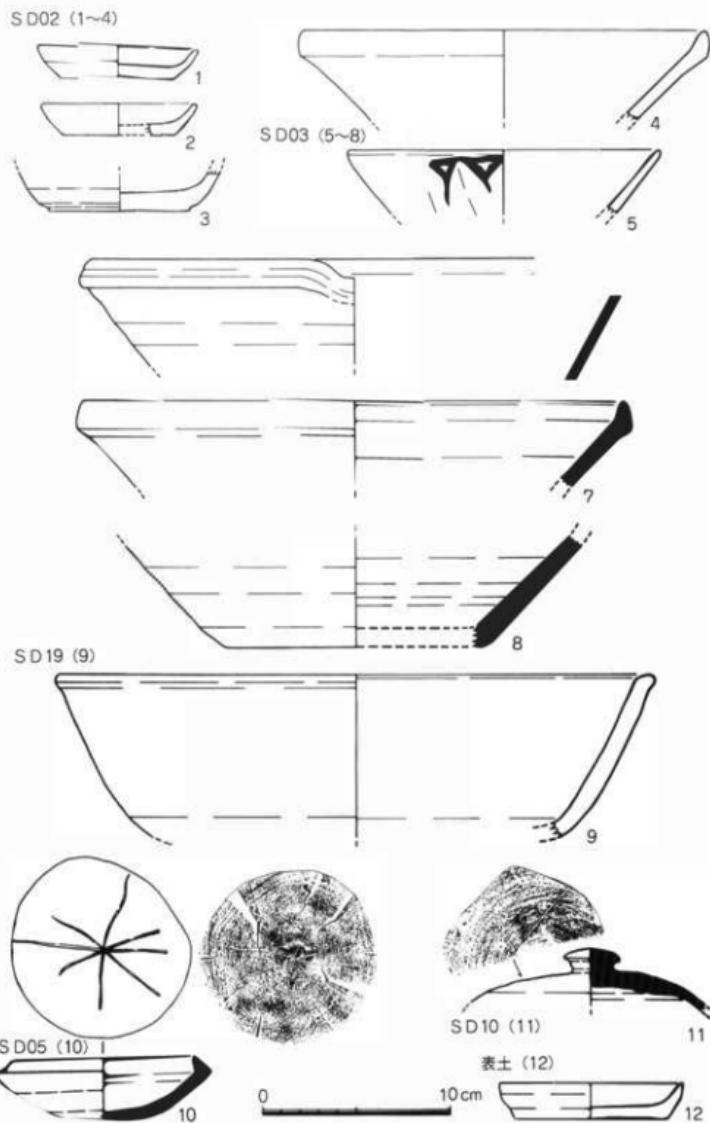


Fig.9 出土遺物実測図 (1/3)

須恵器

鉢 (6~8) 6・7は口縁部細片で、端部が玉縁状を呈している。6は片口部分が若干残存している資料である。内面は横方向のち斜めのナデ、外面はヨコナデで、口縁端部外面に自然軸がかかる。口径28.0cmを測る。7は口径29.4cmを測る。8は底部の細片で、底径14.0cmに復元される。

SK19

土師器

鍋 (9) 口縁端部で若干外反し、上面は平坦である。内面は横方向のナデ、外面の口縁直下は縱方向の刷毛目、他はナデ調整である。器壁は厚く、胎土はやや粗い。口径は31.6cm。

ST05

須恵器

壺身 (10) 完形品である。内面はナデ、外面は受け部直下まで回転ヘラケズリで、内部に焼成前のヘラ記号がみられる。たちあがりは、内傾したのち端部でやや外反する。淡青灰色を呈し、胎土・焼成ともにはば良好である。口径9.8cm、器高3.4cmを測る。

ST10

須恵器

蓋 (11) 握宝珠つまみを有し、口縁部を欠損する資料である。天井部内面はヨコナデ、外面はカキ目調整し、焼成前の線刻記号と思われる沈線がみられる。暗紫褐色を呈し、微砂粒がやや多いが、焼成は良好。

表土採集

土師器

小皿 (12) 底部は糸切りで、口縁端部が極端に薄く仕上げられている。胎土・焼成ともやや不良で、口径9.8cm、底径8.4cm、器高1.9cmを測る。

#### 4. おわりに

今回調査した久富大門口遺跡からは主として古墳時代の土壙や土壙墓、鎌倉時代以降の区画溝を検出した。以下、周辺の歴史的状況や過去の調査結果などを概観し、まとめとしたい。

調査区の中央部から南西部にかけて集中する土壙および土壙墓は、6世紀後半～7世紀に比定されるものである。当遺跡の西、約600mの地点で調査した「久富鳥居遺跡」からは5世紀前半～中頃に比定される堅穴住居が確認されており、周辺の地形を合わせ考えると、両遺跡が所存する標高10.0～14.0m程度の中位段丘上には古墳時代中期から後期にかけての集落が形成されていたことと考えられる。しかし、当遺跡と久富鳥居遺跡から検出した遺構の時期については約1世紀の幅があり、それぞれ別の集落が形成されていた可能性を考えられ、今後の調査が待たれる。

次に鎌倉時代以降の区画溝を検出したことで、この時期に関連性のある周辺部の歴史的状況について簡単にふれたいと思う。当遺跡の周辺部には概述のとおり福岡県指定文化財が多く点在する地区で、位置関係はFig.10に示されるとおりである。当遺跡の北部には熊野区熊野神社（以下熊野神社）と熊野区坂東寺（以下坂東寺）があり、周辺部には両寺社と強く関連性を示す「大門口」や「鳥居」などの小字が散在している。熊野神社と坂東寺は、筑後市史（第1巻第4編中世）によると桓武天皇の延暦年間（782～806）に創建されたとあるが、伝言あるいは社伝であるとされ、その根拠はないものとされている。現在のところ熊野神社と坂東寺の関係は、広川莊領家職が熊野山に寄進された保延4年（1138）以後に莊の鎮守社として熊野神社が勅請され、その神宮寺として坂東寺も創建されたという解釈がなされており、画期となったのは、鎌倉時代以降であることがうかがえる。さらに、坂東寺境内には貞永元年（1232）の銘をもつ凝灰岩でつくられた「石造五重塔」が建造されていて、鎌倉時代の様式を伝える石造塔としては貴重である。

さて、当遺跡から検出した区画溝（SD02・SD03）は13～14世紀に比定されるもので、久富鳥居遺跡や久富斗代遺跡からも同年代に比定されている溝を検出している。久富鳥居遺跡で検出した溝は区画溝として考えられているもので（SD019・SD050・SD059・SD060・SD061・SD065・SD075・SD080・SD090）、この他ほぼ方位を同じにする掘立柱建物群も確認されている。一方、久富斗代遺跡については自然の落ち込みと思われる不整形な遺構が多く、区画溝としては捉えられないようである。各遺跡から検出したほとんどの溝はかなりの削平を受けていて、溝の幅は一定ではないものが多く、遺構の方位角はTab.1に示したとおりである。区画溝の方向は各地点でそれぞれ規格制はあるものの、広域的には関連性が薄いものである。考えられることは、各地点で地形に制約を受けていたことや各遺跡とも顕著な出土遺物がなかったことから時期にかなりのずれが生じている可能性があり、今後の検討課題として残る。

以上、当遺跡周辺部を含めた素描を行ったが現状ではこれ以上の検討は困難で、今回は周辺の歴史的、地理的状況をふまえ、若干の課題を指摘しておくことに留めておく。

最後に熊野、久富地区は筑後市内の中でも宅地化が進んでいる地区であり、今後の調査がおおいに期待されるところである。



Fig.10 関連遺跡配置図 (1/5,000)

遺構名	方位角	備考
久・大SD01	N-55°-W	東西溝
久・大SD02	N-18°-E	南北溝
久・大SD03	N-70°-W	東西方向
久・大SD03	N-25°-E	南北方向
久・鳥SD019	N-90°-E	東西溝
久・鳥SD050	N-4°-E	南北溝
久・鳥SD059	N-94°30'-E	東西溝
久・鳥SD060	N-5°-E	南北溝
久・鳥SD061	N-95°-E	東西溝
久・鳥SD065	N-2°-W	南北溝
久・鳥SD075	N-0°-E	南北溝
久・鳥SD080	N-0°-E	南北溝
久・鳥SD090	N-15°-W	南北溝
久・鳥SB110	N-5°30'-E	主軸
久・鳥SB120	N-4°-E	主軸
久・鳥SB130	N-1°-E	主軸
久・鳥SB140	N-2°-E	主軸
久・鳥SB150	N-10°30'-E	主軸
久・鳥SB160	N-13°-E	主軸

Tab.1 関連遺構方位角一覧

\*記載した遺構名は下記の略号による。

久・大SD01→久富大門口遺跡SD01

久・鳥SD01→久富鳥居遺跡SD01

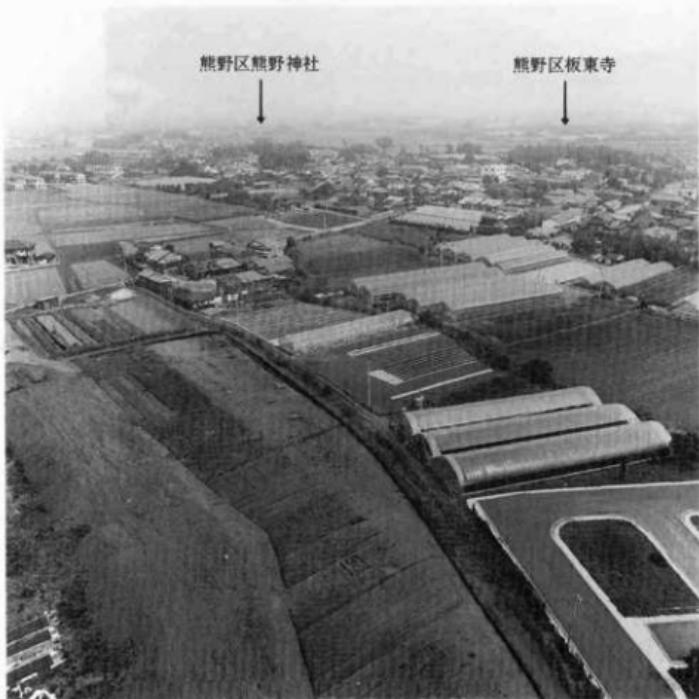
(参考文献)

筑後市史 第1~2巻 筑後市 平成9年

久富鳥居遺跡 筑後市文化財調査報告書第13集 筑後市教育委員会 1994

久富斗代遺跡 福岡県文化財調査報告書第124集 福岡県教育委員会 1996

## 図 版



久富大門口遺跡遠景  
(空中写真・東から)



久富大門口遺跡全景  
反転前  
(空中写真・西から)



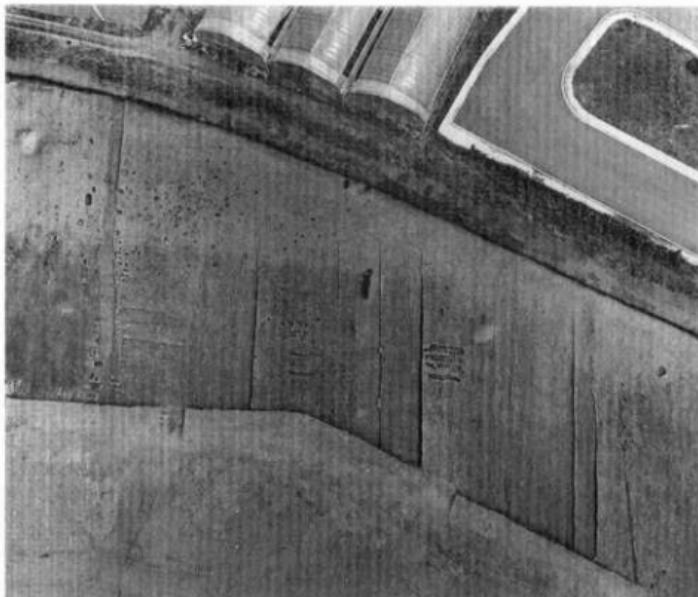
久富大門口遺跡全景  
反転後  
(空中写真・西から)



調査区西側反転後  
(空中写真・真上から：  
上が北)

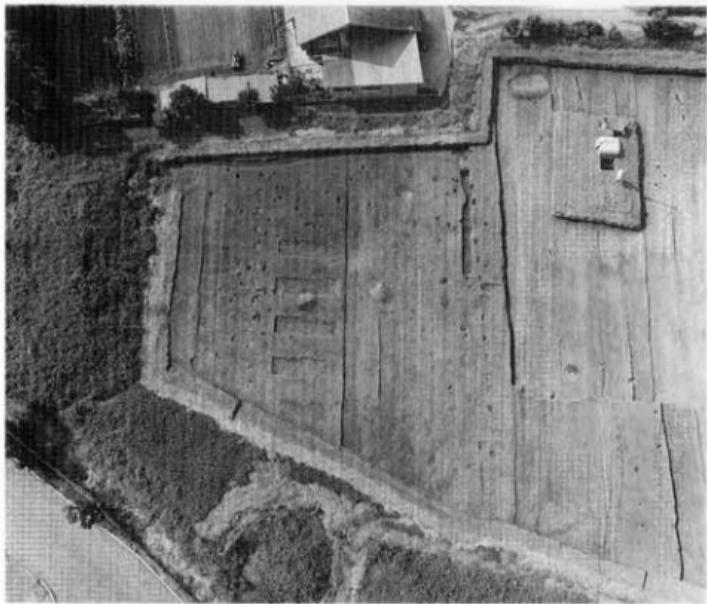


調査区西側反転前  
(空中写真・真上から：  
上が北)

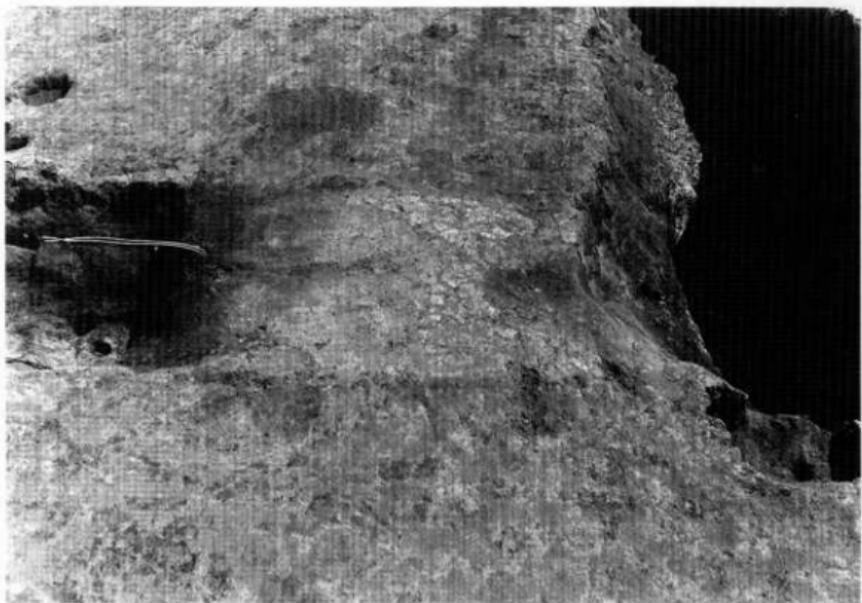




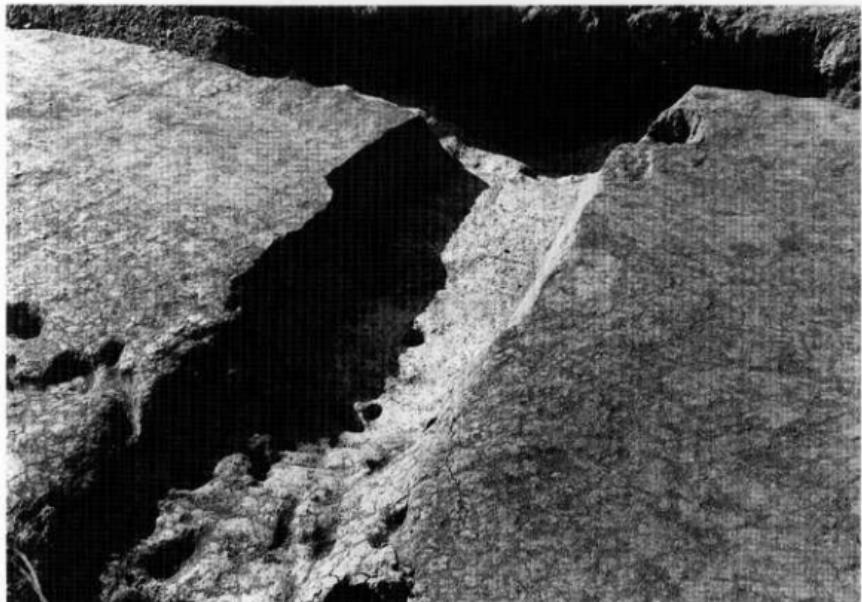
調査区東側反転前  
(空中写真・真上から:  
上が北)



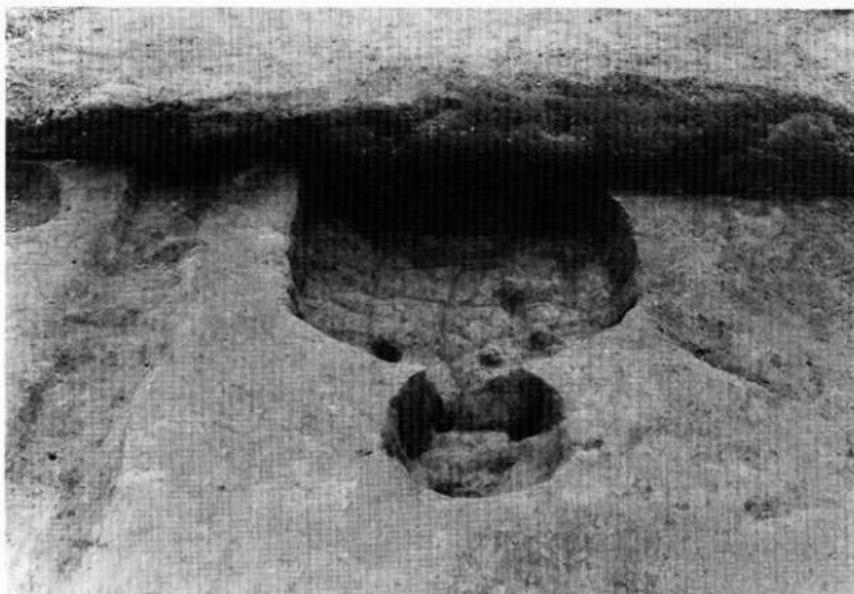
調査区東側反転後  
(空中写真・真上から:  
上が南)



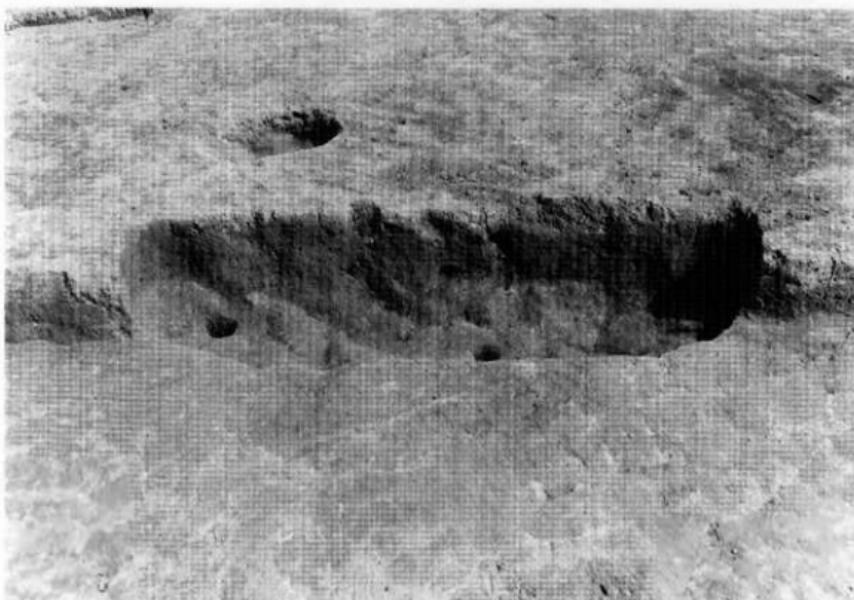
SD03陸橋部（西から）



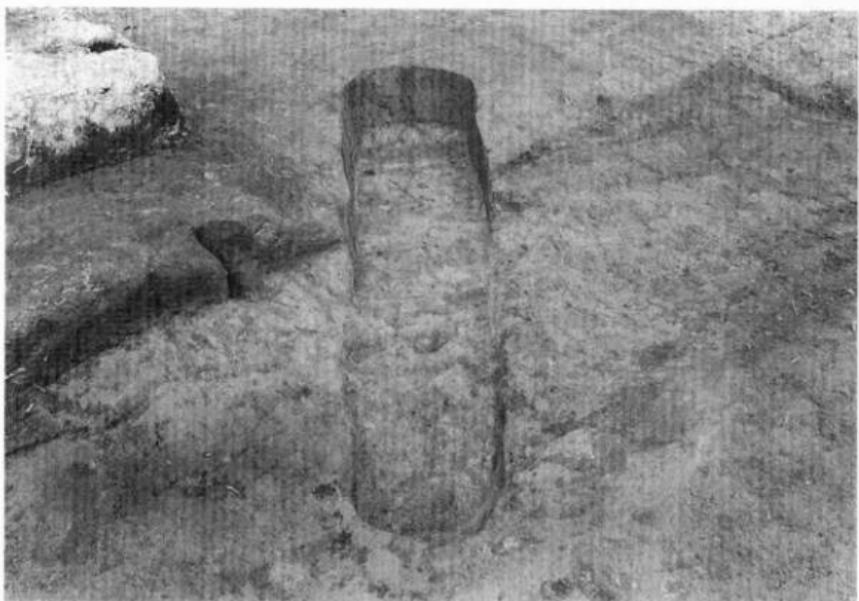
SD03陸橋部完掘（北から）



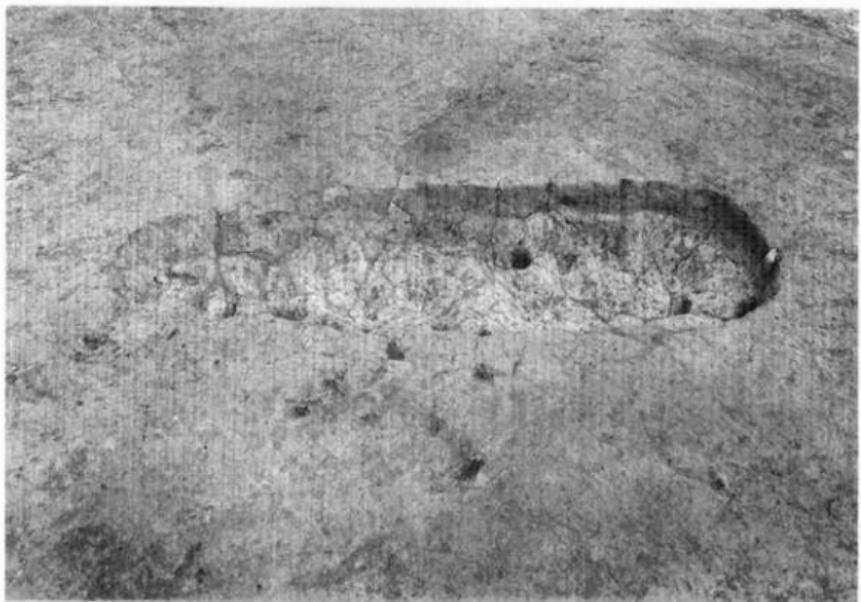
SK14 (北から)



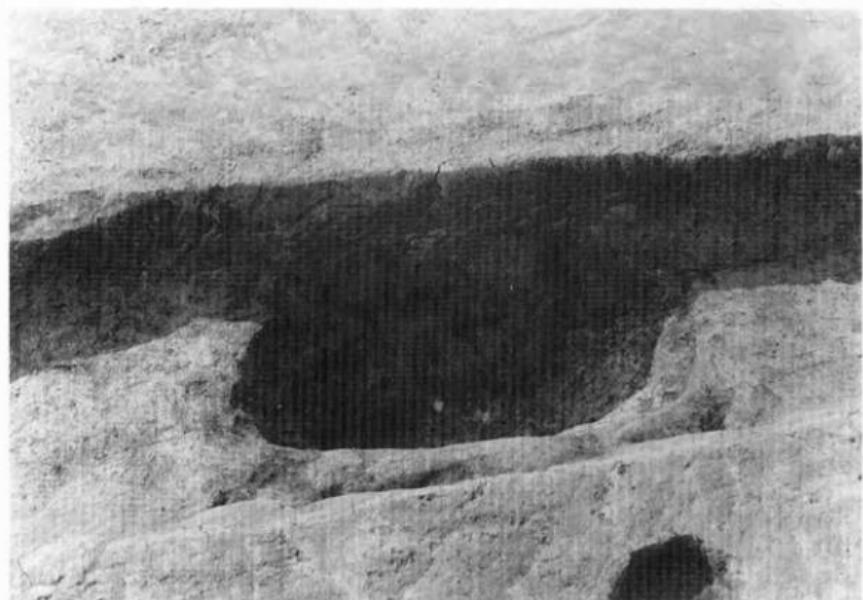
SK15 (西から)



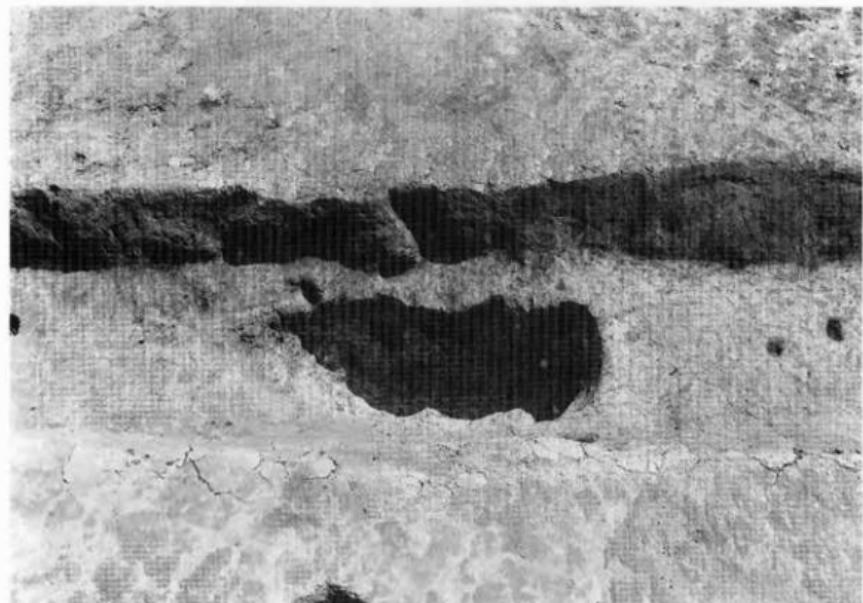
SK16 (南から)



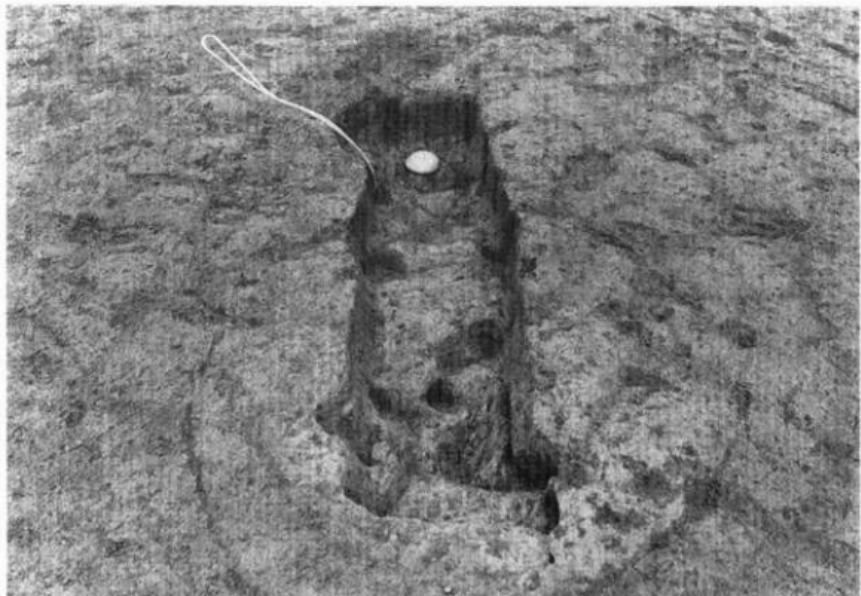
SK17 (南から)



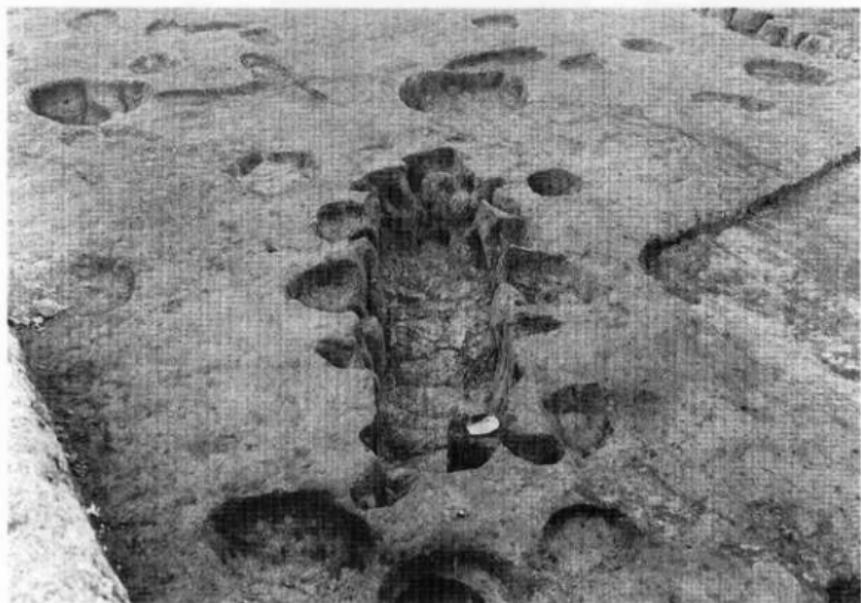
SK19 (東から)



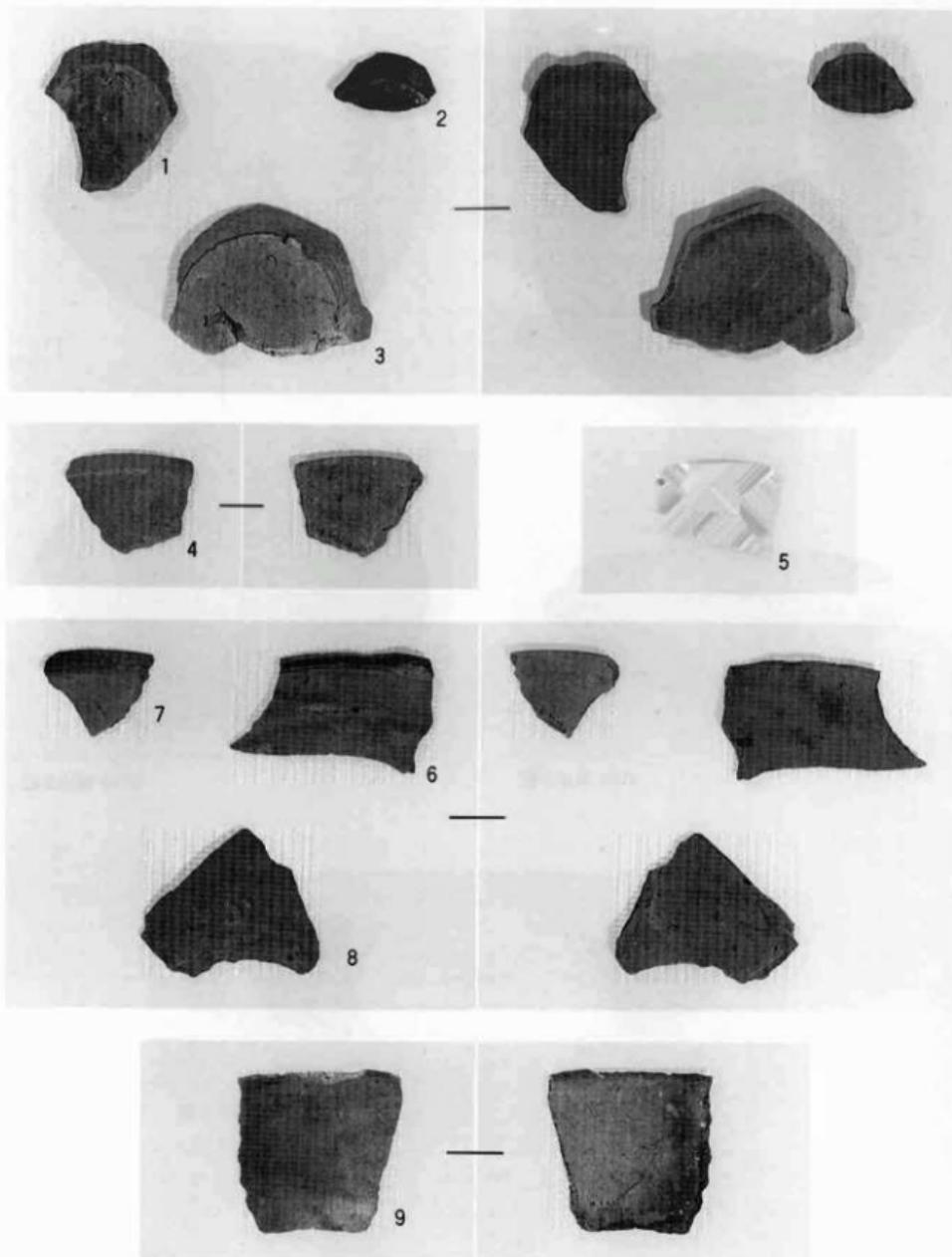
SK20 (東から)

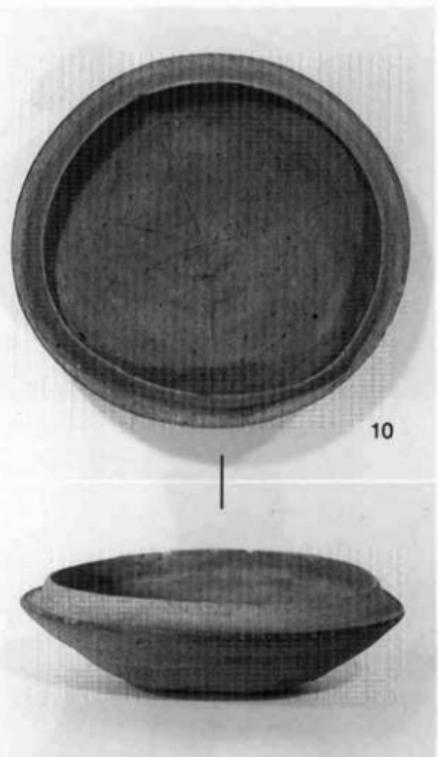


ST05 (南から)



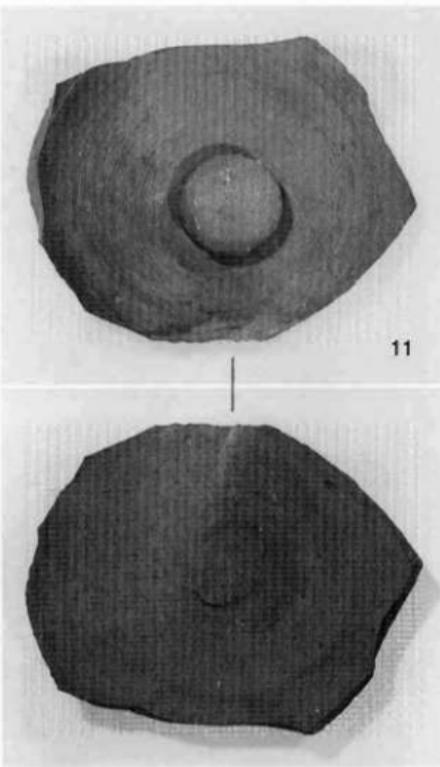
ST10 (南から)





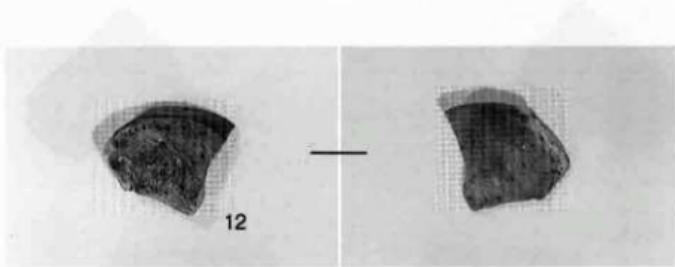
10

ST05 出土土器



11

ST10 出土土器



12

表土採集出土土器

久富大門口遺跡

筑後市文化財調査報告書 第18集

1998年3月

編集発行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

印 刷 山下プリント

福岡県筑後市大字熊野1848-6



付図 久富大門口遺跡遺構全体図 (1/300)